

十二の風景

阿部 昭



# 十二の風景



阿部  
昭

河出書房新社

## 十二の風景

昭和五十六年九月十五日 初版印刷

昭和五十六年九月二十五日 初版発行

著者 阿部 昭

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―二〇一(営業)

四〇四―八六一(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷

製本 大口製本

©1981 Printed in Japan

定価 一五〇〇円

目

次

地図にない場所	舞文曲筆について	午睡のあとに	日本人の文章	フランスの田舎で	日記のことなど
101	85	67	45	25	7

まぼろしの名画	宝石のような	闇の中の呪文	冬の夜ばなし	古い切抜きから	植物学者と庭師
215	195	175	157	139	119

装  
幀  
カ  
ツ  
ト

大  
沢  
昌  
助

## 十二の風景





日記のことなど



これからしばらくの間、日記をつけてみようかと思う。日記といっても、むろん本物の日記ではない。こういう場所（雑誌「文藝」）に掲げて人に読んでもらうのだから、賈の日記にきまっている。おもてむき日記の体裁だけを借りる、どことなく日記めかして書く、というにすぎない。

実は、このページを与えられて一年間、好きなことを書いているうちに（既刊『言葉ありき』）、それでも私はなんとなく窮屈に感じ出した。自分の文章がだんだん鼻についてきた。なんでも書きたいことを書きたいように書いてみようと、そう思って始めたつもりだったが、やはり知らず知らず読物としての恰好をつけたら、かりそめの論旨にとらわれて話がいやに理窟はったりしがちであった。

論旨などというものは、まことにつまらぬものである。人が文章を面白く思うのは、決して論旨のためなんかではない。

それで、ますます嫌気がさしてきた。自分が本当に書きたいのは、こんなものじゃないんだ、もっと別なものだ、と思いはじめた。無理は一切したくない、ごくあたりまえに呼吸でもするように書きたいものだ、と。なんのことはない、毎月毎月きちんきちんと題目を設けて書くのが億劫になり、その反動でもっと横着なやり方をしたくなつたまでのことかもしれないが。

そんなわけだから、日記とは称しながら、事実の日付も前後するかもしれない。突然何年も昔のことを持ち出したり、話題もここかしこ転々、大いに脇道にそれるかもしれない。虫の居どころによっては、誰彼をつかまえて遠慮のないところをぶちまけるやもしれない。それもなにも文学に限らず、諸事百般、およそ言葉にする値打のある事柄ならなんでも言葉にしようというのである。

まさか盗作剽窃はやらないが、何処の何様のものとお断りした上で、人の文章もせつせと引き写したり、必要とあらば図面だの写真だのも入れたりしようと思つている。

長さなども、毎回どれくらいとは決められない。書くことがなくなつた所で、今月分終りということにさせてもらおうかと思う。

そんなとりとめのない、行き当りばつたりりのものを、と読者は言われるかもしれない。しかし、この人生というものがそもそもとりとめもなく、行き当りばつたりりものではないか。そいつを小説にするかしないか、読物にするかしないかは、全然別個の問題である。早い話が、趣味の問題である。

しかも、この人生という漢々たるものを、いきなり言葉にしようとしたって、それは出来ない相談である。さしあたって、われわれが呼吸しているのは、私の言葉で言えば、人生の一日、である。一日につづく一日、そのまた一日につづく一日があるばかりである。つまり、日記のようなものである。

まあ、どんなことになるやら、手をつけてみなければわからないが、やってみることにしよう。

二

日記といえば、私はこの二月に朝日新聞夕刊のコラム「日記から」の締めくくりに、「小さな宝」というのを書いた。べつに再録するような文章でもないのだが、話の都合上、左に引かせていただく。

——小学五年生の息子が、ときどき机の下あたりにもぐり込んで、なにかを読みふけている。一年生二年生当時のクラスの文集で、そこには自分の文章もいくつか載っているのである。担任の先生が一年間せつせと生徒に書かせて、そのつどガリ版で刷って、最後には一冊にまとめて残してくれたもの。一年五組のには「いちご」、二年五組のには「ニコラス」という表題がついている。

以前は馬鹿にしていたその文集を、子供はいまごろになってまじめに読む気になったらしい。その頃の自分はどんなふうであったか、どんなことを考えていたか、また、どんな友達がいて、その子はなにを書いているか。こっそりのぞいて見る気になるらしい。

私が中学時代に国語を教わった女の先生は、夏休み冬休みのたびに日記を宿題にした。そして、かならず提出させて読み、ていねいに感想を記して返してくれた。おかげでその期間だけは生活の記録が残っている。あとになってそれがどれほど役に立ったか。

「世界はひろい。二度とおなじ日はない。二度とおなじ時間もない。世界が出来てからこのかた、おなじ木の葉は二枚となかった」そんな言葉を読んだことがある。誰もがかつてなく、これからもないきょうと

いう日を生きている。日記に限らず、人が物を書くのはそのためだ。物を読むのもそのためだ。

子供は、例の二冊の文集を、自分の持物の中では宝物をしまっ箱に入れておられるようである。

——以上が全文だが、これが新聞に出て三日後、私は東京都北区西ヶ原で齒科を開業されているらしい（封筒にそう印刷されてある）KY氏から手紙をいただいた。

#### 前略

先生の御執筆の朝日新聞の「日記から」毎回楽しみに拝見いたしております。

過日（二月二日掲載分）の「小さな宝」のうちに「世界はひろい」の御引用文の中に「世界が出来てからこのかた、おなじ木の葉は二枚となかった」とお書きになっておられますが、私の記憶と若干ちがっておりましたので、失礼とは存じましたが、一筆御書き申上げた次第でございます。

「世界はひろい。二度と同じ日はない。二度と同じ時間もない。しかし世界創造よりこのかた、たがいに同じじき二枚の木の葉はあった。」

イギリスの風景画家コンスタブルの言葉と存じます。

学生時代に読んだ記憶がございます。

先生の御書きになられた御文でも、十分にその寓意はつかむことが可能とは存じますが、コンスタブルの云いたかったことは同じものはこの世界にはないかもしれないがそれにも関らず、必ず同じじき二枚の木の葉はなくてはならぬという、風景画家の願いと何か祈りを感じました。

愚見を申上げましたが、先生の御記憶の中に留めて下されば幸甚でございます。

猶一層の御健筆を御祈り申上げます。

もちろんKY氏は私のまったく知らない人である。筆蹟文面から察するにかなりの年配の方、少くとも私よりははるかに年長と思われる。その先輩が辞を低うして青二才の私をあえて「先生」と呼ばれる。私は恐縮せざるを得なかった。

そこで私は早速、氏に御礼とともに反省の葉書を書いた。——問題の引用文を、小生はリルケのエッセイ『ヴォルプスヴェーデ』から孫引きしたので、コンスタブルの原文に直接あたったわけではなかった。リルケもむろん翻訳であるが、実は、手許のA氏B氏二種の翻訳を読み較べてみると、その個所は兩者まったく正反対に訳出されており、小生としては半信半疑のまま、自己流に解釈してそのような過ちを犯した。恥かしいことで反省している、と。

ちなみに、私が参照した本では、こう訳されていた。——コンステールはある手紙でかう書いてゐた。「世界はひろい。二度とおなじ日はない。二度とおなじ時間もない。世界創造よりこのかた、たがひに相同じき木の葉は二枚となかった。」このやうな認識に到達してこそ、人間はあたらしい生活をはじめることが出来る。背後にはなにももない。まへに一切がある。しかも、「世界はひろい。」……  
そうして、私はそれきりKY氏とのやりとりのことも忘れていたのである。



KY氏が、見覚えのある大きな洋封筒でまたも丁重な書面を寄せられたのは、それから二カ月後、四月に入ってからのことであった。

春暖の候、先生には益々御健勝の段御喜び申し上げます。

扱て過日先生御執筆の朝日新聞掲載の御文に対しましての私の愚問に早々に御返事賜わりましてまことに有難う存じました。

実は先生の御葉書中の「A氏訳とB氏訳」という一節を読みまして、学生当時、私も同様の疑問を感じましたのを憶い出しリルケの原典を調べましたところ、(私の申上げました原典とはリルケのウオルプスヴェデの独文のことで、コンスタブルの原典ではございません)、やはりこの二つの訳し方にはそれ〴〵理のあることを感じまして、早速独文の専門の方と、ドイツ人とスイス人に尋ねました。結論といたしまして、A氏(即ち二枚の同じ葉はあったという訳)はどちらも疑問が多くB氏(二枚の同じ葉すらなかったという訳)の方が独乙語的には正しいとする意見が多いようでした。

随いまして、私が先生の御文に対しまして異議をとなえましたことは間違いで、先生のお書きになられた方が正しいということです。独文の解釈のみならず、前後の文章のつながりからみましても、リルケが若い画描きたちに書く内容から決して同じき物はない方が文脈も通じていると存じます。